

四条畷高校ボランティアレポート

医療ボランティアを終えて

1年5組 石黒美法

今回のベトナムでの医療ボランティアは、私に大きな影響を与えた。

以前までは、「ボランティア」という言葉は知っていたものの、それはどこか空虚であり、私の中では偽善的なイメージであった。私たちのボランティア活動の内容は、手術前や手術後の患者さんへの点眼、眼内レンズの管理が主だった。どれも日本では出来ない貴重な体験であり、初日は緊張でガチガチだった。そんな中、手術後、目が見えるようになった患者さんの笑顔を見た時、ボランティアが偽善であるなどという考えは消えていた。ボランティアとは何なのか、人を笑顔にすることがどれほど素晴らしいことなのか間近に感じる事が出来た。自分の中に小さいながらあった「人の役に立ちたい」という思いが溢れ、何の目標も無かった私に「自分は将来こんな現場で働きたい」と明確な夢が出来ていた。同行していた日本人ドクターは、他愛もない話も熱心に聞いてくださり、普段触れ合うことのない医師という職業の方から将来へのアドバイスを聞くこともできた。ドクターやナースの方々とも親しくさせていただき、ボランティアの活動も自分で考え動けるようになった頃には最終日となっていた。たった3日間ではあったが、その内容は私の生きてきたこの16年で何より濃密で、大きな出会いが詰まっていた。その分、別れは悲しいもので、自分が疲れ果てていることにも気づかないほどだった。私はこのボランティアツアーで服部医師が「自分の身を削ってでも人のためになりたい」と考えた原点を見ることを目的としていた。今回の経験はそうした願いを満足させるものとなり、自分の将来も見つめることが出来た。

私は今まで、失敗を恐れ、行動する前から自分で限界を作り諦めていたのだと気付いた。同時に自分と対照的な先生方に強い憧れを抱いた。服部先生の「never give up」「失敗を恐れるな」この2つの言葉をいつまでも心に残していたい。そして、自分で持つことができた「医療従事者になりたい」という夢を、叶えたいと強く思う。



僕はベトナム医療研修に行き、確かめたかったことがあります。それは理想の医者とは何かということです。ここで理想の医者の説明は後々します。僕はこれを知ることが目的にベトナムへ行きました。僕の将来になりたいと思っている職業は医師、それも心臓外科医という死を左右するものです。しかし、最近になりたいと思っても僕になる資格があるのか、また、なった後どのような医者になるのか。本当に僕が理想の医者になれるかどうか自信がありませんでした。理想の医者とは、医師という職業を選んだ理由が、高いお給料をもらうためなど、自分へ対しての欲望的目的でなく、自分はどうなってもよく、患者さんさえ治り、患者さんの感謝や喜びにあふれた笑顔が見られたらそれで満足だと考えている医者のかげと考えていました。まさに、ベトナム医療研修で出会った日本人医師三人のことで、彼らこそ僕の思う「理想の医者」です。僕はそのような医師たちの仕事風景を見たり、意見や考えを聞いて僕の将来の夢について熟考してみたかったのです。

研修において、僕たちと同行する医師たちはまさに僕の思う「理想の医者」たちであり、ボランティアという活動の中で、ある先生は患者の気持ちに寄り添い、洗練された技術ですばやく手術をほし、またある先生は長年、手術に使用する医療品を負担してボランティア活動を今まで続けておられました。とても上からで失礼ですが、本当にすばしく、日本人の誇りとなるような医師たちでした。彼らは僕たちに様々な意見を残してくれました。要約するには、しきれないほどですが、無理矢理すると、「何事も最後まで続けるとそれまでの苦労の数だけ、上のステージに上がることができ、やり続けることで嫌なことでもやり甲斐が生まれてくる。NEVER GIVE UP!!!」というものです。日本人医師の三人もあまたの苦労や執念の上で今に至っているのだなと強思いしらされた言葉でした。



今回のベトナム医療研修で結果から言うと、理想の医者とは何かということを確認することができましたが、僕がなれるかどうかという疑問の答えまでは分かりませんでした。しかし、ベトナム医療研修へ行き、時間が経った今、ひとつ分かったことがあります。それは、理想の医者とは、患者を第一に考える医師ではないということです。もちろん、患者第一を否定しているわけではありません。とても大切なことだと思います。しかしベトナム医療研修で初めて服部先生がメスを握った手術は、服部先生曰く、その場には医師の中では胡殿先生しかできない手術だったそうです。その手術は再手術でした。誰かが失敗をし、その屍式を服部先生が行ったわけです。しかし、もし、その場胡殿先生並みの腕をもつ医師がいなかったら、その患者は取り返しのつかないことになっていたかもしれません。また、ベトナム人の医師もボランティアをしておられましたが、その人は腕があまり良くなく、同じ手術でも日本人の医師と比べ二倍ほど時間がかかっていました。もし、高難易度の手術なら、患者との体力勝負にもなるので成功率も下がり、最悪の場合、患者を助けられないかもしれません。これから、医者は腕で決まると痛感しました。

そして、今、僕はある医者を目指そうと思っています。どのような医者か、それは皆から必要とされる医者です。腕のない医者は戸籍全、患者に迷惑をかけてしまうだけです。だからこそ、僕は、腕がある医者、つまり、皆が求め、この医者に手術してもらいたいと思われるような医者を目指そうと思います。それが一番大切だという考えに最終的には、このベトナム医療研修で行き着きました。これが正解かどうかは分かりません。ですが、まずは皆から必要とされる医者こそが理想の医者だと信じ、目の前の今、僕たちがしなければならないことを全力でやり遂げていこうと思います。

最後になりましたが、ベトナム医療研修を計画し、協力していただいた先生方や、医療関係の方々、本当にありがとうございました。

将来は必ず文系の仕事に就くと考えていましたが、医療現場でのボランティア活動に参加して、その考え方は大きく変わりました。はじめは、ボランティアよりむしろ、外国で五日間を過ごすことへの期待が大きかったです。実際、社会主義国は日本とは違う点も多く、異文化による刺激もたくさん受けました。通訳のティエムさんがいらしたので、観光中は言葉の壁を感じることはありませんでした。しかし、多忙な眼科医療の現場ではティエムさんも暇ではありません。状況がつかめず何をすればいいのか分からないことも多かったです。力になりたくても、何もできない状態は、悔しかったです。ベトナム語が分かれば、と強く思いました。

点眼の際、私たちに手を合わせて頭を下げる患者さんがおられました。自分が持つ責任感よりも大きな信頼と感謝を受けていることを実感しました。そして、「見えない」が「見える」に変わることが、患者さんにとってどれほど大きなことなのか、考えさせられました。



自分にできることをするのは、重要なことです。しかし、目線を向けるべきは自分ではないことを学びました。相手が必要とすることを、どうにかして提供する。これこそが、ボランティアに必要な精神だと思います。しかし、実行には言語の知識や専門的な知識、技術が必要であることも分かりました。今回の研修において、いざという時自分が医療現場では役に立たないことが分かりました。それは当たり前のことです。しかし、状況が変わっても、無知な状態ではできる働きが限られてしまいます。誰かのために行動できるように、勉強と向き合っていかなければならないと感じました。将来は、人のために全力を尽くせる仕事に就きたいです。そのことを見据え、着実に準備を進めていかなければと思います。

私はこのベトナム研修で本当に役に立てるのか、邪魔にならないだろうかと少し心配でした。しかし、一日目より二日目、二日目よりも三日目とどんどん自分の出来ることを見つけられるようになり、手際もよくなりました。一日目は眼内レンズが大量に入っている段ボールやスーツケースの整理から始めました。眼内レンズの消費期限や度数や種類ごとに綺麗に並べつつ、指定された眼内レンズを速やかに取り出すという作業でした。この作業は私が最も好きな作業でした。段ボール箱は何個もあり、中身は整理整頓されていないものが多くありました。一日目は3箱がやっとだったように思います。その他にも手術が終わった患者さんを病棟へ案内したり、手術室の見学などをしました。二日目は患者さんに点眼しました。「上」、「開く」という意味のベトナム語を教えて頂き点眼しにくい患者さんにはそう言って協力して頂きました。何週もするので私が来たら目を開けて上を向いて下さる方が多くて嬉しかったです。

三日目はまた眼内レンズの整理と包装です。二日目も隙があれば眼内レンズの整理をしていたのでどこに何があるか一日目よりも把握できていました。そのおかげで急遽眼内レンズが必要になったとき瞬時に渡せるようになりました。どういった眼内レンズがどの段ボール箱に入っているかは大体わかりましたが点眼の仕方はまだまだだと思えます。手術室内に入って言われた物を渡したり、外の掃除をしたり、包装するために色々な鞆を開けたりなど、他にも多くの私でもできることがありました。



一日目は来ただけで言われるがまま、しかも反応が遅いといった状態でしたが、三日目になるとそれぞれが自分でできることを探して手伝っていました。白内障手術が間近で見ることができたり、色々な先生方と関わるができる、私にとって忘れられない体験でした。自分の考え方が広がる素晴らしい研修でした。

5泊6日のベトナム研修、それは私にとってとても重要な経験になった。貧しい人達の所に行き、無償で手術をする人達のボランティアをした。手術の手伝いや、患者の世話、その他の雑用などをした。

はじめはなにをしたらいいかわからず、たくさん怒られて、注意された。しかし、次第に慣れ、自ら何をしたらよいかわかるようになった。最終日には自分なりにサポートができたように感じられた。ボランティア活動は本当に疲れて、大変だった。医師になるには体力があると痛感した。だが、日本人の先生は体力だけではダメだと言った。「体力があっても、それを支える気力がないとダメだ。」と。気持ちがないとダメだということだ。医師になるのは大変だ。

はじめて服部医師を見たときは自分の信念を持って行動している人は一味違うなと思った。服部医師は第一に患者の事を考え、患者の家族だと思い治療をする。そして手術はとても迅速だ。私の思い描いている良い医師とはこの人だと思った。私が医師になりたいと服部医師に言うと、とても期待してくれ、将来楽しみにしていると言ってくれた。また服部医師は私たちにこう教えてくれた。「何事も全力でしろ。失敗はしてもいい。諦めるな。」と。失敗をしたからこそ、このボランティア活動の成功があったと思う。それに、患者の目が治り見えるようになった時の顔は忘れられない。

病気が治った時の患者の嬉しそうな顔は私の将来の医師になる夢をよりいっそう強めた。服部医師のように自分の信念を持って、例えば可能性が1パーセントでもあるなら諦めないような医師になりたい。まず私にできることは何事も精一杯全力でがんばり、たくさん失敗をしてたくさん学ぶことである。



私は将来看護師になりたいくてこの研修に参加しました。この研修でいろいろと考え方が変わり参加してよかったと本当に思っています。最初、服部先生と会ったときとても威厳のある方だなと思いました、それに3日間で診察する患者の数は約120人と聞いたとき白内障の手術について知らない私でも普通では考えられないということがわかりました。ハノイ郊外の病院を見てベッドに2人寝ていたり、手術室に普通にいたり、携帯を触ったりと日本とは本当に違い驚きました。初日は何をするかかわらず先生の指示を聞くことしかできなかつたし、点眼が終わり、私たちはずっと手術室の前に立っているだけで、何をすることもすべて受け身の姿勢になってしまいました。その夜、私たちで中と外の仕事を交換しあい、自分たちでできることを探して明日からは積極的に動こうと思いました。2日目は私たちは中の仕事だったので眼内レンズの仕分けや必要な眼内レンズなどを患者さんに渡したり手術室でガーゼを開けたりしました。余った時間でゴミ拾い、段ボールの補強や自分たちでできる限りのことをし、どう動けば次使う時に便利かということを考え行動しました。途中、池田先生や関山先生とたくさん絡んで楽しかったし将来につながることを聞けて良かったです。ティエムさんには患者さんに話しかけられたとき通訳して助けてもらったり日本人とベトナム人をつなぐ大きな役割をしていて周りから頼りにされていてすごいなと思いました。本物の手術を見たときmm単位の細かい作業をしていてとても見ごたえがありました。3日目、手術してもらった患者さんがガーゼをはずし見えるようになって喜んでる姿を見てすごく感動したし自分も嬉しくなりました。先生たちは人が喜ぶことを本当に大切にしている患者さんのあのような笑顔があるからこそ無償で治療を続けられるのだらうなと思いました。先生の後ろについて動くことが多く、指示されたものも初日よりずっと早く用意できていることが多かったです。

靴をそろえたりテープを渡したり点眼にも慣れスムーズに動けることができました。今回のボランティアは普通の高校生では味わえない将来につながる経験で人間的に尊敬できる方たちに出会えて本当にありがたく思うし、これから先私が大人になってもこのようなボランティア活動に参加し、この経験を活かし自分が思い描いているような看護師になりたいです！本当にありがとうございました。

